

地域企業や公共図書館と連携し社会に貢献

地域の企業や公共施設とも連携し、さまざまな形で地域貢献を行う金城学院大学。今回は生活環境学部生活マネジメント科のイルミネーション制作と金城学院大学図書館と公共図書館との連携を紹介します。

古寺ゼミ × 久屋大通庭園フラリエ

久屋大通庭園フラリエを彩る イルミネーションを学生が考案

生活環境学部生活マネジメント学科の古寺ゼミが、本学薬学部網岡教授の紹介により大日本印章株式会社社長村松氏からの依頼を受け、このたび久屋大通庭園「フラリエ」のイルミネーションを手がけました。

イルミネーションはゼミの3年生がデザインを企画し、製作会社と打ち合わせを行い



ながら形にしていきました。まずは9月下旬に学生たちがフラリエを見学。あまりの敷地の広さに驚き「本当にできるのだろうか」という声も聞かれました。その後四つのグループに分かれ、芝生、遊歩道、池、外壁の4ヶ所を担当。昼休みの時間などを使ってそれぞれに打ち合わせを行いました。ツリーを作り、音楽に合わせて光らせ、また外壁には大きなハートを飾るなどさまざまなアイデアを考案。自撮り台を置いて写真スポットを作るなど「学生ならではのよいアイデアですね」と製作会社も感嘆しました。



※画像はイメージです。

「自分が考えたものを形にするのにどれだけ多くの人々の力があるか、身を持って学んでもらえたと思います」と古寺先生は話します。

11月29日には点灯式を開催。金城学院大学らしい演出としてハンドベルの演奏も行われました。学生たちの渾身のイルミネーションは今も美しく庭園を彩っています。

金城学院大学図書館 × 公共図書館

瀬戸市や名古屋市 の図書館と連携し 本の展示や帯作り教室を開催

大学図書館は学生ボランティアのライブラリーサポーターズ「LiLian」と協力し、各市の図書館と連携して多彩な活動を行っています。

去る8月8日～8月31日、瀬戸市立図書館

で中高生の夢を応援するティーンズ向けの展示企画「YUMEZORA～ひろがる夢、かがやく未来～」を行いました。

企画や実行は「LiLian」のメンバーが中心となって運営。中高生の憧れの職業に就いている人の生の声とその人たちのおすすめの本を紹介する「REALフラワー」、LiLianメンバーがおすすめの本を紹介する「Dreamスター」、風船型のPOPに将来の夢を書いて展示する来館者参加型の企画「Dreamパルーン」の3コーナーを作り、展示を行いました。

また9月5日には名古屋市守山図書館で小学生向けの企画「本の帯作りにチャレンジ」を開



催。子どもたちの想いを最大限に表現できるようにLiLianメンバーがサポートし、帯作りを行いました。一生懸命楽しそうに取り組む子どもたちが印象的でした。

10月3日～11月8日は名古屋市志段味図書館で中高生向けのおすすめ本をかわいの手作りPOPとともに展示。愛らしいPOPに惹かれ、本を手取る中高生の姿も見られました。3月には同図書館にて、ブックパーティも開催予定です。

大学図書館はLiLianとともに今後も本と人をつなぐ、さまざまな活動に取り組んでいきます。



想像力豊かな遊びを通して 年上児から年下児へ 伝えられる知恵や経験

家庭ではひとりっが多い現代ですが、幼稚園では異年齢での生活を通して年上児・年下児が互いに思い合い育ち合う関係を築いています。子どもたちが遊びを通して様々なことを年上児から年下児に伝えていることを、こんなエピソードから感じていただければと思います。

幼稚園に通う子どもたちは「おだんご」を作ることが大好きです。土も粘土も砂も豊富にある園庭では、1年を通しておだんごづくりをする子どもたちの姿が見られます。おだんごをたくさん作って「おだんごやさん」をしたり、トッピングをして「ケーキやさん」になったり、いくつか組み合わせさせてキャラクターを



いっしょにおだんごづくりをする年長児と年少児

作ったり、一つを慎重に丁寧にピカピカに仕上げ光るおだんごを作ったり…子どもたちの想像力は本当に豊かです。ある「おだんごやさん」では、できたおだんごを「これは小さいから1歳さん用ね。」「こっちは4歳かな?」と大きさごとに並べていました。店番をする子どもたちの「いらしゃいませ。お金は葉っぱです。」の声に、近くで遊んでいた子どもが落ち葉を集めて買いに来てくれました。

入園して間もない年少児にとって、年中児・年長児の手からのぞくおだんごは魔法のようで「どうしたらできるのだろう…」と、見よう見まねで砂を集めていました。しかし、水分の少ない砂をいくら握っても、なかなか固まってくれません。そんな年少児に「お水がないと固まらないよ」とアドバイスしてくれたり、自分たちが用意したバケツの中の土(丁度いい湿り具合)を分けてくれたりする年長児。その土の感触を体得して、次に作る時は自分で砂に水を加える年少児。子どもたちには、直接的な言葉でなくても、実際に見たりふれたりしていく中で経験を積み重ね自分



おだんごいかが? お代は落ち葉で

のものにしていく力が十分に与えられていることを感じます。

子どもたちは丸めてできた土のおだんごに白砂・さら砂をかけていきます。この作業ひとつでも子どもたち一人ひとりの特徴がよくわかります。目の細かいざるで濾した砂だけを使う子ども、乾いている砂をとにかくたくさんかける子ども、乾かすためにさら砂の中におだんごを埋めて取り出す子どもなどさまざまです。どの子どもも今までに年上児から直接教えてもらったり、年上児のおだんご作りの過程をじっと見ている中でやってみようとする思いや方法を身につけたりしているのです。

こうして子どもたちの間で遊びや「こうしたらできるんだ!」「こんな方法があるんだ!」という経験が直接的、間接的に伝えられています。普段の生活を異年齢で過ごしている子どもたちが、こうした豊かな経験をしていることを嬉しく思っています。

自発的な遊びと「あつまり」をつなげて 子どもたちの経験や成長を より豊かなものに

上記の活動のように、3・4・5歳の子どもたちが一緒に過ごす縦割りの活動に加え、発達段階を捉えより多くの刺激となるために、週に二回ほど同学年での活動(私たちは「あつまり」とよんでいます)を行っています。

ある日の年少児の「あつまり」では、お花紙といわれるやわらかい和紙を使っておだんごを作りました。片手に乗せたお花紙をもう一方の手で挟んでクルクルと丸めていきます。いつもは泥や粘土でおだんごを作っている子どもたちにとって「紙からおだんごができるなんて!」と驚きの表情を見せる子どももいました。おだんごを作るだけでなく、新しい素材にふれる機会にもなりました。普段は泥が嫌い、手が汚れるのが

嫌と泥だんご作りを経験せずにいる子どもも楽しく経験することができました。

「あつまり」のなかで保育者は、同年齢での活動のねらいのもとで一人ひとりの発達段階を捉え、適切な課題を提供できるようにしています。子どもたちにとってそこの活動は、普段の遊びの中で新しい刺激になっています。お花紙のおだんご作りを経験した子どもたちは、早速空き箱製作の飾りに折り紙を丸めてくっつけていました。ほかにも紙粘土をつかってアクセサリーをつくらしたり、保護者の保育参加の機会に本当に食べられるおだんごを作ったり、その経験のあとには家庭でもおだんご作り挑戦した子



おうちの方と一緒に
おだんごクッキング

ももりました。おだんご作りの経験をいろいろな場面で、素材も土や砂、粘土、紙、食材などさまざまなもので繰り返すことによって、経験を深め、幅が広がっていきます。「あつまり」のなかだけでは終わらずに子どもたちの普段の遊びや生活につながっていることを嬉しく思っています。幼稚園では自発的な遊びと「あつまり」は切り離されたものではなく、子どもたちの生活の中で互いにリンクさせながら、子どもの成長をより豊かに促しています。

平和のために署名活動を行う広島女学院の生徒が来校 ひとつの「ファミリー」として、ともに平和を考える

中学と高校では毎年8月20日に全校礼拝を行い、平和についてみんなで考えています。今回、広島女学院高校署名実行委員会の生徒たちが「平和について一緒に話す機会を持ちたい」と来校。ともに平和について話し合い、署名活動を行いました。

今回の企画の中心となったのは生徒会執行部で結成された「PEACE隊」。「ぜひ、何か一緒にできることはないか?」とスカイプを使って広島女学院の生徒たちと打ち合わせを行いました。「同じ高校生でも平和について細部まで考えていると実感しました」と高校3年生で宗教常任委員長を務める稲垣亜梨さんはいいます。また同じく3年生で生徒会長の筒井愛理さんは「金城学院でも東日本大震災の支援活動を行っています、広島女学院のみなさんと話をするうちにこの活動も平和活動の一つではないか」と改めて考えました。



今回の活動で出会った人々が全員つながるという意味を込めてキーワードを「ファミリー」とし、お互いに何度も話した結果、一緒に街頭で署名活動をする事になりました。

広島女学院の生徒たちは8月19日に来校。栄や名駅でともに街頭署名活動を行いました。初めての署名活動に戸惑うこともありましたが、2校の生徒が一緒になって大声で呼びかけ、署名する人も徐々に増加しました。「今回は1時間でしたが、もっと署名活動をしたかったです」と筒井さんは話します。

20日の礼拝では、全校生徒の思いを一つに結び合わせたお祈りを、ともに手を取り合って神さまに捧げました。そのあとのロングホームルームでは広島女学院の活動や金城学院の東日本大震災支援活動をプ



レゼンしました。愛と感動、希望にあふれた全校礼拝となりました。

9月には広島女学院の生徒たちから感謝の言葉が綴られた手紙には、一つひとつの言葉が愛にあふれていました。今後も両校が手を取り合い、さらなる祈りの輪、ファミリーの輪が広がることを願っています。



中学校テニス部が東海大会で優勝・全国大会に出場



去る10月3日、三重県四日市市の北勢中央公園で行われた「東海私学中学校テニス大会」に中学校テニス部が出場しました。

この大会は各県の私学テニス連盟の推薦を受けた私立中学校の中学1・2年生のみに参加資格が与えられるもので、東海地区での開催は今回が初。愛知、岐阜、三重、静岡の4県から私立の推薦校12校が集まり、ダブルス二本、シングルス一本の試合を行いました。

初戦は三重県3位の實力を誇る津田学園中学校に2-1で勝利。準決勝は同じく三重県2位の鈴鹿中学校に3-0と快進撃を続け、決勝は静岡2位の浜松日体中学校に3-0で見事優勝に輝きました。特に決勝では一本目の

ダブルス、シングルスでそれぞれ勝利、この時点で優勝が決まっていたが、生徒たちはそこで気を抜くことなく残りのダブルスも最後まで粘って勝つことができたのです。選手一人ひとりがチームのことを考え、コーチのアドバイスをしっかりと聞いて一生懸命プレーしました。

この試合の結果、兵庫県神戸総合運動公園で12月26～28日に行われる全国私立中学校テニス選手権大会の出場権を獲得。新校舎建築で練習場所が限られていますが、今後も厳しい練習に耐え、先輩方にも練習相手になっていただきながら勝利に向けて努力を重ねていきます。

高校科学部の「ゆめちから栽培研究プログラム」 栽培研究や収穫の成果をプレゼンで発表



高校の科学部が昨年9月から取り組んできたPasco主催の「ゆめちから栽培研究プログラム」。北海道で開発された国産の強力小麦「ゆめちから」をプランターで育て、実験や分析などを行いながら最適な栽培方法を研究するプログラムで、金城学院高校のほか、石川県、岐阜県の高校と3校でプログラムを実施しました。

「ゆめちからグループ」の生徒たちは4月の播種(種蒔き)にはじまり、ゴールデンウィーク明けの出穂、9月の刈り取りと世話をしてきました。特に大変だったのは毎日の水やり



です。生徒たちは四つのグループに分かれ、当番制で水やりを実施。穂の高さ測定や生育状況の観察も行います。「移動



教室のときは時間がなくて本当に大変でした」と3年生の田中杏奈さんは振り返ります。また栽培の様子を記録するブログを担当した3年生の武藤詩奈さんは「楽しくブログを作りました」といい、他校の生徒ともブログ上で意見交換をしながら栽培を行ってきました。また2年生の前田真歩さんは「小麦を脱穀するとき、小さな虫がたくさんついていて大変でした」と話します。一本ずつ手でしごきながら種子を取る作業は想像以上に大変だったようです。



9月23日にはPasco本社で3校によるプレゼンテーションが行われ、生徒たちは仮説から実行、結論をまとめた栽培記録

をプレゼンしました。「他校は気温や草丈などのデータも多くあり、見習うところがありました」と田中さんは話します。また今回、収穫したゆめちからのタンパク質の含有量が目標の12%を見事クリアし、Pascoから表彰されました。

顧問の田中武彦先生は「生徒たちは本当によく頑張って研究してくれました」といい、また前田さんはこの栽培研究を通して「みんなで協力することが大切だと実感しました」、田中さんは「農家さんのお仕事の大変さ、すごさをあらためて知りました」、武藤さんは「データをまとめる作業は大変で、研究者の方々はずごといいと思いました」とそれぞれに学びを得ました。製粉されたゆめちからは「みんなでパンを焼いて味わう」とのこと。充実した研究となりました。

中高大のバトン部、そろってバトントワーリング全国大会に出場!

去る10月24日(土)、日本ガイシホールにて開催された「第41回マーチングバンド・バトントワーリング東海大会」において、バトン部が全国大会に推薦されることになりました。

昨年、一昨年同様、今年も高校バトン部だけではなく、中学校部門では中学バトン部が、大学部門では「金城学院大学White Wall」が推薦され、3年連続、三チームそろって全国大会に出場できるという幸いを与えられました。

「第43回バトントワーリング全国大会」は12月12日(土)、千葉市の幕張メッセ・イベントホールにて開催されます。大会で行う演技だけではなく、すべてにおいて支え合う中高大バトン部でありたいと考えております。これまでバトン部を応援して下さった皆様に深く御礼申し上げますとともに、今後も温かい御声援をよろしくお願ひいたします。

